

# 小さな詩人たち

—子ども歳時記・その65—

石川 芳己

草炎俳句会では、平成十八年度から、草炎全国俳句大会の児童生徒の部を創設して、今日まで十二年間にわたって、毎年、山口県内の小中高校から作品を募集し優秀作品を選句して表彰している。広く児童・生徒から俳句作品を募集してジュニア俳句の愛好者を育成し、俳句の教育・普及・発展に資するということである。今回の第四十六回草炎全国俳句大会における児童生徒の作品の中から「大会賞」に選ばれた作品を紹介し寸評を記しておきたい。

○大会賞

かき氷まぜて食べたらゆめのあじ 桜木小二年 貞弘 和花

【寸評】

かき氷といえば、メロンやイチゴ等のシロップの味を連想する。夢の味がしたという。かき氷から発想を飛ばした、何とも不思議なメルヘンの世界である。

雪積もるはしゃぐ弟見る私 高森みどり中一年 岡村 風香

【寸評】

ほのぼのとする一句である。幼い弟は積もる雪を見てはしゃいでいる。姉の私は少し覚めてはいるが、弟の愛らしい仕草を優しく見守っている。

春の海貝がらひろって遊ぶきみ 原小三年 中谷 梨乃

【寸評】

のどかな春の海辺で貝殻を拾って無邪気に戯れている。海と貝殻と遊ぶ子どもを句材として春の風景を素直に描いている。

朝顔と早起き競争勝てるかな 附属光小二年 河野 啓

【寸評】

深夜から朝顔は咲き始める。とても早起き競争には勝てないであろう。しかし、勝てるかな、と疑問の形で留めたところがこの句の妙である。

思い出を日焼けに残し夏終わる 柳井西中二年 田中亜武郎

【寸評】

日焼けした顔や腕や足。夏の思い出をすべて日焼け

した肌に集約した描写がこの句の手柄である。

夏休み鬼太郎ロード歩いたよ 久保小三年 泓田 勇斗

【寸評】

鬼太郎ロードには百七十七体の水木しげるの妖怪像がある。ゲゲゲの鬼太郎に登場する妖怪を連想する。楽しい夏休みの思い出を素直に描いている。歩いたよ、と誇らしげに言う少年が見える。

ぼくの手でペコペコはねるミニバッタ

田布施西小二年 上山 遼人

【寸評】

子どもは昆虫が好きである。ミニバッタを捕まえたら、手のひらでペコペコしている。愛嬌の挨拶か、それとも命乞いか。小さな命への優しさがにじむ一句。

冷え冷えの麦茶もあせをかいている

久保小五年 西田 圭児

【寸評】

冷蔵庫で冷やした麦茶。確かに水滴が付いている。それを恰も汗をかいていると断定しきつたところがこ

の句の主眼であろう。

ぺちやくちやと火花がいつぱい虹ヶ浜

浅江小五年 井上 陽太

【寸評】

火花の音は結構賑々しい。恰も火花がぺちやくちやとお喋りしているかのようなのである。火花が擬人法で描かれている。どんなお喋りなのかと想像してみる。

漢陽寺真つ赤に染まる秋の山 鹿野小六年 岡崎 兔月

【寸評】

漢陽寺は鹿野にある大内氏ゆかりの臨濟宗の古刹である。鹿野は山深く、紅葉の季節には赤く染まる。ふるさとの名刹を愛おしく詠った一句である。

小さな詩人たちの俳句を鑑賞しながら、その純真さと瑞々しさに心惹かれる。確かに俳句の技量は稚拙な面もあるが、自然や人間を素直に受け止め、十七音に纏めようとする真剣さが伝わる。こうした子どもたちの思いを確り広げていきたいと思う。